

ユンフンギル

尹興吉『長雨』論

——へばくへの回想における浄化の可能性——

一、日本における『長雨』への注目

アメリカの作家コジンスキーがポーランドの戦乱に巻き込まれた少年を描いた『異端の鳥』によって、アメリカの文学にとどまらず世界文学の位置にあるように、韓国の作家、尹興吉の『長雨』（姜舜訳・東京新聞出版刊行・一、四〇〇円）は民族間の戦争に巻き込まれた少年を描く事で、単に韓国の文学の領域にとどまらず、世界文学の位置にある。

一九四二年生まれの尹氏と同時代に小説を書く者、あるいは小説を読む者に、この一冊の創作集は、海を越えたところにある一等近い隣国の韓国が、まさに小説の宝庫だと証していると映る。この一冊は、日本の文学の現在をも照らし出す。⁽¹⁾

中上健次は「尹興吉『長雨』の衝撃―戦争に軋む土俗を直視する―」において、尹興吉の『長雨』⁽²⁾が「世界文学の位置」にあり、それゆえ韓国は「小説の宝庫」だと激賞した。こういった中上健次の熱烈な支持⁽³⁾と日本での人気⁽⁴⁾のために、尹興吉は、日本において『長雨』（東京新聞出版局、一九七九年）、『黄昏の家』（東京新聞出版局、一九八

洪 ホン

明 ミヨン

嬉 ヒ

〇年)、『母(エミ)』(新潮社、一九八二年)、『鎌』(角川書店、一九八九年)との四つの作品集⁽⁵⁾をはじめ、中上健次との対談集である『東洋に位置する』(作品社、一九八一年)を出版している。

では、尹興吉の何が、とりわけ本稿で取り扱う『長雨』の何が、中上健次や日本文壇において、注目を浴びるようになったのかを考えてみたい。

まず、本稿冒頭の引用において「民族間の戦争に巻き込まれた少年を描く事で」「世界文学の位置にある」と、戦争に関わる作品として高く評価した中上健次が、対談集『東洋に位置する』において述べた以下の箇所は、注目に値する。

たとえば『長雨』で言えば、朝鮮戦争というものの、戦争が引き起こした民族の中の亀裂、痛みとか願いとかそんなものが海をへだてて住む僕なんかに伝わる、ああ、なんでこんな大きな悲劇を知らなかったんだろうと、尹興吉を通して感じた、そんなふうな実感が自分でもあった。

日本の戦後、高度経済成長期の基盤となった韓国戦争であるが、中上健次が「こんな大きな大きな悲劇を知らなかった」と述べているように、日本の多くの読者はその悲劇の内実をあまり知らないのではないだろうか。すなわち、日本は太平洋戦争を通して戦争の痛みを経験しているものの、「同族間の戦争がな」く、「いまま戦争中ではない」「臨戦態勢でもない」のである。それに対して、韓国は「いままなおかつある意味では戦争継続中」であり「臨戦体制」に入っており、「分断されていることで、同族間の痛み」が続いている⁽⁶⁾。日本の植民地からの解放後の社会における左右両勢力の激闘と、その延長線上の同族同士による韓国戦争は、一九五〇年六月二五日に勃発した。その戦争は、たった三日でソウルが陥落し、九月一日にマッカーサー將軍が仁川上陸作戦を展開し、ソウルの復元と共に平城と国境の鴨緑江、豆満江まで進撃した。しかし十一月一日の中国軍の参戦により、十二月一日に国軍は興南から撤退、更に一九五二年一月四日のいわゆる「一・四後退」を経て、一九五三年七月二七日の休戦協定の調印まで、

三年一ヶ月間にわたる、韓国の同族間の戦争となった。この結果、人的被害として、凄まじい数の死亡者と戦争未亡人、戦争孤児、離散家族が生まれた。また韓半島全体が戦場となり廃墟化し、経済的にも社会的にも暗黒期が到来した。特に、戦争中、共産軍は南の占領地域の住民を、国軍はソウル修復後、共産軍に協力していた人々をそれぞれ処刑したのだが、仕方なく共産軍に協力していた良民が多く犠牲になったため、民族間に怨恨と不信が生じた。更に、今なお南北の分断という現実があることから分かるように、韓国戦争は物質的な側面のみではなく、社会のありとあらゆる側面において深刻な後遺症を残し、その後の韓国社会のあり方や、人々の内面における意識や思想にきわめて深刻な影響を与えた。加えて韓国戦争は、こういった内部的な状況以外に、当時の資本主義と社会主義の対立という世界情勢の犠牲として、同族間が戦わなければならない痛みを背負うようになったことは言うまでもない。このような戦争における悲劇の深さが、日本の場合とは異なるといえよう。

『長雨』は、こういった韓国戦争による「民族の中の亀裂、痛みとか願い」のリアリティーがよく表れている作品として評価されていたのである。中上健次が、冒頭の引用で「民族間の戦争に巻き込まれた」「少年の眼の切なさ、苦しさ」⁽⁷⁾を指摘し、また柄谷行人氏も、

私にとって興味深かったのは、何といっても、子供の視点で書かれた「長雨」と「羊」だった。⁽⁸⁾
と述べるように、その戦争のリアリティーは特に、少年の目を借りて描かれている点において着目すべきことがわかる。以上のように、中上健次らによる日本における尹興吉の『長雨』の評価軸の一つは、少年の視点からなる戦争文学としてのものがある。

更にもう一つの評価軸として考えられるのは、同じアジア、東洋に位置し、当時の西洋文明による近代化に矛盾を感じる立場から、対アメリカ、対西洋という認識において共鳴するところがあったか、あるいは当時の日本文学において、「東洋における日本」という意識が薄れていたということである。

それで尹興吉の小説の場合でも、その中にある東洋的なもの、非常に僕なんかが、無自覚だったものが、色濃く、圧倒的にあるみたいな気がして、ある意味で羨しい、という気がしているんですけどもね。

中上健次は、対談集『東洋に位置する』において、尹興吉の小説から「無自覚だった」「東洋的なもの」を感じる述べたが、確かに『長雨』にも、東洋的な要素が多く含まれている。例えば、外祖母の見た歯が抜ける夢の予言の中し、外叔父（息子）が死んだり、祖母が占いの予言を信じて叔父（息子）の帰還を待つところに、死者の体現物とされる大蛇が出現するなど、作品は土俗的で東洋的シャーマニズムに富む世界である。更にその大蛇の出現により、祖母も外祖母も息子を失ったという共通項を持つことで和解し、戦争によって傷を負った人々の浄化と救いの可能性が形象化され、家族や血縁の情の問題などが描かれている。すなわち、シャーマニズム、家族や血縁の情など韓国の民族的で土俗的な要素が、戦争による葛藤からの和解という主題と深く関わって前景化されているのであり、それは、日本人にとってもまさしく東洋的と認識させられる世界であったといえよう。

三つ目として、冒頭の引用で、『長雨』は「日本の文学の現在をも照らし出す」存在だと述べた中上健次が、対談集『東洋に位置する』において示した、以下の箇所を見たい。

これは若い世代だけではなく日本の文学状況みたいなものに対してもそうで、僕より上の世代も貧血病状を呈していて、血が薄い。それこそ何か大事なものを置き忘れてきて挙句に小説を書いているみたいな感じがして、すごく不満を持っていたわけです。（中略）それが韓国に来てみて、たった一つ『長雨』という作品を読んで、衝撃と、一挙に視界が展かれるような気がし、なんというかどんな大きな社会的政治的な事件より、『長雨』という作品があり日本語に訳されていることが事件だと感じたんですね。

中上健次は、尹興吉の『長雨』を「貧血症状」を呈している「日本文学状況」にあって「どんな大きな社会的政治的事件より、『長雨』という作品があり日本語に訳されていることが事件だと感じた」と、述べた。これは日韓の文

壇の差異を垣間見ることができると指摘である。

この問題については、文京洙氏がすでに、一九七〇年代の日韓の社会像とそれに関連した文壇状況、そしてその差異を綿密に検討することで、尹興吉の日本における注目を解いている。韓国政治史を専攻した氏は、以下のように整理している⁽⁹⁾。まず日本の社会と文学のあり様については、「高度成長というとてもない社会変動をくぐりぬけた社会と意識の変容」を背景に「外部世界と対峙する確固とした自我の不在を意識しながら、日常を漂う実在性の希薄な「私」をひたすら問いつづける」作家による文学であったと指摘した。それに対して、韓国の社会と文学のあり様については、「維新体制」(七二年～七九年)と呼ばれる「非民主的な政治状況とともに急速な産業化」という乖離の引き起こす極度の緊張を背景に「蓄積された都市貧民の物的、精神的な疎外状況」を見る知識人達の思いと、更に「分断」という現代史の運命に翻弄されながらもそれを超える民衆自身の営み」「生の実在」として「現実と激しく切り結ぶ強烈な課題意識」を文学世界に形象化したと指摘した。この考察から文氏は、「とめどなく内面へと沈みつく鬱々とした日本の文学状況、そんななかにあって、尹興吉文学はきわだって鮮明な光茫をはなちえた」と結論づけている。

以上のように、日本における『長雨』は、韓国戦争によって韓国民が経験した悲劇とそこからの和解を模索するあり様が描かれた作品として、またシャーマニズムなどの東洋的認識の下に家族や血縁の情の問題などという共通項を持つ作品として、更に日韓の社会像と文壇状況の差異によって感じられる新鮮さ、力強さのある作品として、注目されるようになっていたのである。

二、韓国における先行研究

「長雨」は若い少年の眼をかりた心理的な推移過程に焦点を合わせて、またシャーマニズムとイデオロギーの問題を結びつけて、韓国戦争の独特な様相をあらたに浮き彫りにしているのだ。⁽¹⁰⁾

呉生根氏は、『長雨』を尹興吉の代表作として高く評価し、その理由として、右の文章を挙げた上で、『長雨』を「尹興吉という一人の作家の作品集のなかに位置づけられるだけではなく、韓国文学史という広範な体系のなかに、しっかりと組み込まれた」とした。また、ノジンハン氏は、『長雨』を韓国戦争文学として高い評価を与え、その理由として、「平凡な一家族の物語の中に韓国戦争の悲劇とその和解の過程をシャーマニズムという精神的土台の下に凝縮させたから」であるとした⁽¹¹⁾。これらの先行研究は、『長雨』を、韓国戦争という悲劇的状況を何かの論理やイデオロギーという理性主義的観点から語るのではなく、非理性主義的観点、非合理的観点のシャーマニズムによって解こうとした世界と捉えたものである。

それに対して金ユンシクは、「イデオロギーという近代的価値形態による葛藤を反近代的なシャーマニズムによって解消することは近代的小説の未満であるか、あるいは叙事詩への後退」であると批判した⁽¹²⁾。確かにシャーマニズムは反近代的、反理性的なものではあるが、それについては、次に挙げる尹の文章を見てみたい。

一人の作家として、私に出来ることは、ただ外国からイデオロギーと共に入った銃砲の陰に隠された、人間的な真実を明らかにし、我が民族固有の伝統情緒を通して同質性をしきりに確認していくことを通して、私達がまさか夢にも願っていなかった舶来品であるイデオロギーの結果で、日を重ねるに連れ、深化させられる南と北の異質化現象を克服する作業に、自分なりに頑張るのみだ。⁽¹³⁾

この文章は、尹が『長雨』などの作品執筆と関連し、イデオロギーは外国から入ってきたものであること、作家として、そのイデオロギーの陰に隠された「人間的な真実を明らかにし、我が民族固有の伝統情緒を通して」「同質性」を確認していこうとしたことを示している。すなわち、近代の理性主義ではなく、あえて非理性主義、非合理的なものである、民族的同質性を確認できるシャーマニズムを導入したことが注目でき、叔父は人民軍、外叔父は国軍となり、左右のイデオロギーによって分裂させられた一族が、大蛇をめぐって和解するという『長雨』は、尹興吉の韓国民族固有の伝統情緒というシャーマニズムを通して同質性を確認するあり様が表現された作品としてみることができるとする。

ただ、シャーマニズムを通じて和解するあり様は確かであるが、その際、血縁の情が大きく関わっていることに留意すべきであろう。その点については、四章で述べることにする。

次に、先に引用した呉生根氏の「幼い少年の眼をかりた心理的な推移過程に焦点を合わせて」の指摘にもあったように、『長雨』は幼い少年の目で見た世界というのが、その特徴であると評価されている。またチョンイドウ氏は、へぼくが過去を回想する時点に立っているため、作品のトーンは一貫して述懐的と指摘した⁽⁴⁾が、それは過去の幼い少年と、語る現在のへぼくの存在に着目した指摘である。更に、

祖母のながい一生のうちで、寝もせず食べもしないで驚くべき氣力をふるい、何日もの間家族たちをやきもきさせながら、叔父の帰りを待っていたとても短い時間こそが、いわば消える直前に一瞬ぱっと燃えあがる蠟燭の燦めきのような、最も誇らしく幸福にみちた時間であったのだろう。

祖母がシャーマニズム、すなわち古い師の言葉を信じ、息子の帰還を待ちつつ準備していた時間について、「最も誇らしく幸福にみちた時間であったのだろう」と意味を付与するのは現在の語り手へぼくである。また『長雨』の現在のへぼくは、最終的に非理性主義、非合理的なシャーマニズムや、血縁の情による和解を肯定する人物として

描かれており、そこに〈へぼく〉の語りの意義はあるであろう。すなわち『長雨』は、過去の戦争の傷が癒され、和解と許しあいによる、希望への始動を、現在の〈へぼく〉の語りを通じて可能にするという構造にある。

従って、本稿では、〈へぼく〉の語りの意義、更に〈へぼく〉が、反目する祖母と外祖母をめぐるシャーマニズムをどのように受けとめていき、和解と許し合いにつながるのか、ということに着目しながら、作品世界を読み解いていきたい。

三、現在の〈へぼく〉の語りの意義

なぜもしもじしていたのかぼくはわからなかった。受け取っていいのか、絶対に受け取ってはならないのかを、決めかねていたためだったろうか。あるいは、そのような道徳的な問題ではなく、単にその年頃の田舎っ子らしく、知らない人間にたいする人見知りのせいでそうだったのか。確かなことは憶えていない。ともかくぼくは、かなり長い時間ためらっていたようだ。

これは、純粋な子供である〈へぼく〉が、チョコレートをもらって叔父のことを話すという場面であるが、このように作品には、出来事が起きた小学校三年の時と、回想しつつ当時の自分の思いを推測し語る現在という二つの時点が存在する。チョンイドゥ氏は、語る現在の〈へぼく〉が、過去を回想する時点に立っているために、作品のトーンは、述懐的なもので一貫しており、「作中のアクションの熾烈さに比較すれば、その文章のトーンはその熾烈さに少しも感染されていない」とし、そこから「アイロニー」が生じると指摘した¹⁵⁾。確かに、上記の場面においては、静かな述懐的語りであるからこそ、戦争によるあらゆる悲劇の実態がより浮き彫りになっているといえよう。すなわち、〈へぼく〉はチョコレートの誘惑に負け、「このおじさんは本当に叔父さんの友達かもしれない」と思いはじめると、心が

少し軽くなった」と合理化しつつ、私服刑事に叔父が帰ってきていた事実を話してしまうのであるが、それにより、叔父は勿論のこと父までひどい調査を受け、家は常に監視されるようになってしまった。へぼくはそれに対する罪責感と、祖母等からの「菓子一切で自分の叔父を売り渡した人殺し」扱いによる眼差しを余儀なく感じなければならなかった。結局、チョコレートが食べたかった少年へぼくの単純な欲望によって、叔父の死やそれによる家族のもう一つの悲劇が加わり、へぼくの傷と罪意識が生じたのであるが、その過去を語る、現在の大人へぼくの語りは、静かな述懐的語りであることで、罪なき子供までを巻き込んだ戦争の悲劇を一層、高潮させているのである。三章では、こうしたへぼくの回想の意義を中心に論じていく。

・ 畑から豌豆の穫り入れをすませたちょうど次の日から、雨は幾日も降りつづいた。雨は粉末のようにさらさらと落ちる小粒となったり、ときには今にも天井を突き抜くほど降りそそぎそうな恐怖の結晶体となったり、折々気紛れをみせながら、暗闇の夜をまるで濡れ雑巾のように水びたしにしていた。

・ ほんとに厭になる長雨だった。

『長雨』における雨は、タイトルのみならず、雨が降ってくる場面から始まり、雨が止むと終わるという作品の構造において、重要な象徴性を持つ素材である。これをへぼくがどのように回想しているか、雨の意味を明かにしつつ考察したい。『長雨』の冒頭において、「濡れ雑巾のように水びたしにしていた」雨の作品内の特徴が端的に表れているのは、次の箇所においてである。

父は、わざわざ搾りだしでもするように、全身からぽとぽと水滴をしたたけしていた。父ばかりではなく、外から戻ったものは誰もが、体からながれ落ちる雨の滴で、床をぐっしり濡らしていた。薄着の母と外叔母は、ひとえの上着とチマが体にべったりはりついて、ほとんど脱いだも同然な姿で、肌をあらわにしていた。

外祖母の夢の話で不吉な予感のする中、「戸を揺さぶりながら急に一陣の雨風が吹き込んできて、それだけでなく

心細く揺れていたランプの灯を、すっかり消してしまった。」とあるように、雨は生命の消尽のイメージを醸し出していた。外叔父の死という悲報に接した時、家族は皆、雨に濡れているのである。以後、雨は、豌豆や麦に異変を起こさせるが、このように、雨は、叔父の死や家族の悲しみと共に表れ、否定的な意味を内包した象徴物として描かれる。

しかし、「ほんとに厭になる長雨だった。」で明らかのように、最後には雨は止み、やがて戦争による人々の死や傷、背信や報復、更にへぼくゝの罪意識なども救われるという、救いへの兆しを、現在のへぼくゝは語っているのである。

また一方で、死と悲しみを同伴する否定的な雨の世界下において、作品の最終部分には、大蛇の登場が、和解への過程でシャーマニズム的なものとして作用するように、作品には生命力のある自然物が登場する。

ぼくがいくら邪慳に扱っても逃げないで、数日間ずっと家の土間に居坐って動かない一匹のがま蛙がいた。長雨のせいで巣をなくしたそのがま蛙は、自力を振りしぼってよくもここまで雨を避けてきたものだ、と、安堵しているような顔つきであった。だが、床下へ土間へと、その愚かしく生れついた体を、いたずらにのそりのそり引きずって歩く格好は、見るにたえなかった。三日目に、白っぽい腹の皮を空に向けて仰向けに引っくり返し、尻の孔から麦の茎を差しこんで、ゴム毬ほどにもふくれるように息を吹きこんでやったら、どこかへ消えて半日くらい姿が見えなくなった。しかし、朝になると、いつの間にか戻って、自分がいた元の場所にうずくまっていた。石段の上におっとりとしやがみ込み、まるく突き出た目で、軒からしたたる雨粒をばさっと見下ろしていた。

へぼくゝは、戦時下の長雨の中、罪意識を抱き、辛い思いをしていた過去を回想する際に、「邪慳に扱っても逃げないで」居坐っているがま蛙のことを回想している。このがま蛙からは、逞しい生命力を感じることが出来、ここに、新

しい世界の暗示、救いへの可能性が提示されていると思われるのである。

以上のように、現在の「へぼく」の回想は、韓国戦争下の憎悪や殺人、密告と報復という熾烈かつ過酷な状況において、多くの傷を負っていた人々の浄化と救いの可能性を、自然の力を含めて語るところにその意味があると思われる。また、その克服への可能性は、血縁の情からも指摘できるが、その点は第四章で論じたい。

四、「へぼく」における祖母と外祖母

第四章では、現在の「へぼく」における祖母と外祖母像を考察していく。

叔父は人民軍に、外叔父は国軍になるという、「両方にそれぞれ立場を異にする気掛かりができた後でも、表立った変化はなかった。」から明らかであるように、両祖母の葛藤の原因は、イデオロギーではない。ところが外叔父の戦死通知書を受け取った後、外祖母は相い親の顔の色を見ることなく、「アカ」に対し詛うことで、祖母と外祖母の喧嘩ははじまる。ここから、祖母と外祖母の反目はイデオロギーのためではあるが、だからといって、息子達の選んだイデオロギーの中味までを理解していたわけではなく、むしろイデオロギーよりも血縁の情ゆえであることがわかる。そこで、注目したいのは、次の箇所である。

・ 伴が親より先に死ぬのは、親の罪じゃねいか。親に前世の罪が多いから、伴の野郎を先立たせた後まで生き残って、苦しみに耐えて生きなければならんんじゃないのかよ。

・ おめえのお姑さんのいうこと聞いたかい？ これでも名目は相い親だというのに、おれのことを、祀ってくれる伴のひとりもない女だとさ。伴ひとりいたのを国に捧げただけでも悔しくて、嘆かわしいのによ、名目上でも自分の相い親に向かって、それがいう言葉かね。

これらは、祖母の、息子の死は親の罪によるものであるという迷信的で伝統的な思考方式の表出と、また、外祖母の死後に祀ってくれる息子のいないことに対する、悲しみの吐露である。この祖母や外祖母像には、やはりイデオロギーとは関わらない、迷信的な思考や男児嗜好思想と結びついた母の母性、血縁の情という共通性が表れている。

更に祖母たちが母性と関連した血縁の情に深くこだわっていたことは次の箇所からも見て取れる。

辰の刻がすぎても、祖母は平然としていた。少なくともうわべだけはそうであった。お告げがあったときから、自分は時間などさほど念頭においていなかったのだそうだ。重要なのはへある日へであって、けちなへある時刻へなどはどうでもいいことだそうだ。天がつかさどる事にも時たましくじりがあるのに、ましてや人間がやる事など、いちいち是非を糾してみても始まらないのだそうだ。いくら占い師が素晴らしく当てるからといって、時刻ぐらいは、こちらで寛大に受け入れるべきだと主張するのであった。祖母にはまだその日の一日が、たっぷりと残っていたのだ。何時になろうと必ず帰ってくる人なんだから、その時刻まで余裕をもって待ったうえで、母と息子そろって同じ膳を久しぶりに迎えたいと、祖母は少しも疲れた気配をみせなかった。

占い師の予告した時刻が過ぎ、絶望的な状況になっていたにもかかわらず、祖母は「天がつかさどる事にも時たましくじりがあるのに、ましてや人間がやる事など、いちいち是非を糾してみても始まらない」と、これまで信じてきた占い師の予言を蔑ろにしてまで、自己合理化しつつ、最後まで希望を捨てないのだ。このように、最後まで希望を捨てない祖母像からは、シャーマニズムさえ越えた、息子が生きて帰ってくることを切に願う母としての絶対的な愛が表れているのだ。

最終的には、大蛇として帰還した叔父の場面において、大蛇を息子の死を表すものとして見て失神した祖母の代わりに、外祖母が大蛇を大事にもてなすことで祖母と和解するようになるが、ここから、外祖母は自分と同じく息子を失くした母親の「恨」を確認し、最終的に二人の和解が導かれたと見て取れる。

では、ここからは、祖母たちの迷信的で伝統的な考え方について、現在のへぼくは、どのように回想しているかを見ていく。

外叔父の死を予言した外祖母の齒の抜けた夢について「外孫であるぼくには、あえて誰も侵すことのできない不可思議な力として感じられ、これから先長く記憶に残るだろう強烈な感動となった。」と語る。また、祖母が占い師を妄信して叔父の帰りを準備していた時間を「最も誇らしく幸福にみちた時間であったのだろう」とも語るのである。これら外祖母の夢、祖母の占い師への妄信からも明らかであるように、両方ともシャーマニズムの共通情緒を持つていたのであり、それにより、最終的に両祖母は和解に至るようになる。すなわち、一生、シャーマニズムの世界で生きてきた祖母と外祖母は、占い師が予言した「ある日ある時刻」に対する信仰によって、その日、へぼくの家に入ってきた大蛇に対して、石を投げる小僧たちとは違って、死んだ人の魂の体現物として見、叔父の魂の帰還として受け入れたのである。へぼくは、外叔母の大蛇を帰らすために、叔母の髪の毛をもらってくる役割を担っており、祖母の妄信により叔父の帰りを準備していた時間を「最も誇らしく幸福にみちた時間であったのだろう」と振り返る。すなわちへぼくは、シャーマニズム世界にいる外祖母と祖母とを肯定する人物なのである。

なおへぼくの祖母たちに関する回想は、血縁の情とも関わっている。

へぼくは、外祖母の血縁への愛着の行為である、股引の中を触る行為に対して、「たいへんな苦役であり、ひどく侮辱的ないたずらでもあった」と考えていた。

しかし、

絶え入るような長い溜息とともに、外祖母の手が股ぐらから離れていった。手を引っ込めてからも外祖母は、しばらくはなお、ぼくの顔を見下ろしているらしかった。

「可哀そうな奴……」

(中略) そのつぶやきが、誰を指すかはわからない。気の毒な人なら、ぼくの周囲にはたくさんいた。(中略) だかもっとも可哀そうな人は、まさに外祖母自身であったかもしれない。縁側に坐って、雲におおわれた建知山の辺りを見上げる外祖母の姿は、藻抜けの殻のようにみえた。戦死通知書をうけた夜の、あの強烈で空恐ろしかった姿は、もうどこにも見当たらなかった。いまではただ、萎びるだけ萎びて、遠い山ばかりをながめ、ただぼつねんと坐り込む、見すばらしい老婆が一人いるだけであった。苦役から開放されたぼくの気分は、その哀れな姿でたちまち吹っ飛んでしまった。

息子(外叔父)を失くした後の、「強烈で空恐ろしかった姿」すらなく、「ただぼつねんと坐り込む、見すばらしい老婆」を見た時、〈ぼく〉は血縁関係にある孫としての憐憫を感じ、外祖母の肉親としての愛着ゆえの行為を許すことが出来るようになったのである。

また、刑事にチヨコレートをもらい叔父を売ったという理由で、祖母から「人殺し」だと憎まれていた〈ぼく〉は臨終の席で、祖母はぼくの手をとり、ぼくの過去のすべてを許してくれた。ぼくも心の中で祖母のすべてを許した。

とあるように、自らも祖母と真の和解を遂げたことを振り返っているのである。

以上のように、〈ぼく〉は祖母や外祖母のシャーマニズムや母性を肯定し、血縁の情によって和解と許し合いを遂げることが出来たことを回想しているのである。

五、結 論

韓国の現代史における韓国戦争は、戦争の前後から現在に到るまでの韓国を理解する上で中核を為す重要な事件で

ある。

『長雨』は、韓国戦争が一家族にもたらした傷を素材としている。誰も避けることのできない、濡れるしかない長雨の中で起きたこの家庭の過去は、平凡な家庭が北と南のイデオロギーにより分断させられているところにおいて、韓国民族全体の悲劇として明確に描かれている。しかし、こういった韓国民族の悲劇を背負った、一家庭の過去は、やがて雨がやんだと回想するへぼくの語りを通して、土着的、民族的なシャーマニズムと血縁の情による、救いと克服への可能性が描き出された世界といえる。南北間のイデオロギーの対立によって韓国戦争及び分断という韓国の民族全体の悲劇と罪のあり様、更にその浄化や回復への兆しがへぼくの回想によって明確に表された尹の『長雨』は、一九七〇年代の韓国文学の代表作であり、同時に国家や民族のレベルを超えた真実が描かれた普遍性に富む作品だといえよう。

註

- (1) 中上健次「尹興吉『長雨』の衝撃―戦争に軋む土俗を直視する―」『毎日新聞』一九七九年五月八日。
- (2) 韓国での初出は、一九七三年の『文学と知性』春号においてである。なお、韓国でのタイトルは、「長雨、梅雨」という意味の「장마 (Changma)」となっている。
- (3) 中上健次は『長雨』（東京新聞出版局）の初版本帯に「風水の国の作家」というタイトルで「日本で、いままで自分と年格好が似たりよったりの人の作品を読んでも、こんなに驚いた事はなかった。（中略）強い力がある。昏い魅力がある。今、手放しでほめたい。いや、考えたい。」と書いている。
- (4) 遠藤周作は『鎌』（角川書店）の初版本帯に「待望の作品」というタイトルで「私は尹興吉氏のファンである。邦訳は少ないが、緊張感に満ちたテーマを、言葉とイメージの重層性を駆使した新鮮な手法で見事に作品として結実させるこの隣国の小説家は、私を刺激した。久しぶりに日本に紹介される新作『鎌』は、私によって、待望の作品なのである。」と書いている。

- (5) うち「母（エミ）」と『鎌』は韓国より日本で先に出版されている。
- (6) 中上健次、尹興吉『東洋に位置する』、作品社、一九八一年。更に中上健次は、大江健三郎の小説は「牧歌的」で、尹興吉の小説は「シリアス」なものであるとした。こういった彼の言説がこの当時の日本の日本の一般的な認識といえるわけではないが、少なくとも、こういった認識が存在していたことは見て取れる。
- (7) 中上健次、註(3)と同様。
- (8) 柄谷行人「根底の不在―尹興吉『長雨』について―」『群像』一九七九年十一月。
- (9) 文京洙「七〇年代韓国の精神と尹興吉文学」『学苑』昭和女子大学近代文化研究所、一九九一年五月。
- (10) 呉生根「個人と社会の力学」『初版解説』『文学と知性 小説名作選4 九足の靴で居残った男』文学と知性社、一九七七年。（引用は、『長雨』東京新聞出版局、一九七九年。）
- (11) ノジンハン「『長雨』論―韓国戦争とその解決の方法を中心に―」『先清語文』ソウル大学師範大学国語教育科、一九九五年。原文の翻訳は論者による。以後(12)～(15)の引用文も同様である。
- (12) 金ユンシク、チョンホウン『韓国小説史』イエハ、一九九三年。
- (13) 尹興吉『長雨』（今日の作家叢書8）ミンウン社、一九八〇年。
- (14) チョンイドウ「描写と実験」『長雨』（今日の作家叢書8）ミンウン社、一九八〇年。（引用は、『長雨』（今日の作家叢書7）ミンウン社、二〇〇五年。）
- (15) チョンイドウ、前掲論文。

* 作品の引用はすべて『長雨』（東京新聞出版局、一九七九年）に拠る。

* 本稿は、第十一回東北アジア・キリスト者文学会議（二〇〇七年八月二四日、於関西セミナーハウス）での口頭発表に再考を加えたものである。